

## 43回生の西村雄一さんがブラジル W 杯開幕戦の主審に

日本人トリオがブラジルワールドカップ開幕戦の審判を務めることで話題になっていますが、主審の西村雄一さんは新宿高校卒の 43 回生。前回の南アフリカ大会でも今回も副審を務める相楽さん、韓国人副審と組んで 4 試合で主審を努めました。なかでもブラジル・オランダ戦でブラジルの選手にレッドカードを出して、その毅然とした審判ぶりが話題になりました。W 杯観戦の楽しみがひとつ増えました。

なお、「朝陽」60 号には南アフリカ W 杯を終えて一時帰国した西村さんのインタビューが掲載され、南アフリカ W 杯の印象、ご自身の経歴、国際審判員の生活について語っておられます。

以下のページをご覧ください。

## 選手のために誠心誠意尽くす

— ワールドカップ・南アフリカ大会を終えて —

FIFA(国際サッカー連盟) 国際審判員 西村 雄一 (43回)

— W杯での活躍は大きな評判になりましたが、帰国してからメディアに引つ張りだこで大変な毎日ですね

**西村** ブラジル戦でのレッドカードが新聞に写真付きで大きく取り扱われたためですが、帰国した時の注目度の高さとにかく驚きました。

— 本題のW杯で笛を吹くまでの道のりについては後でゆっくりお聞きするとして、最初に高校時代についてお聞きしたいのですが、その頃からサッカー漬けだったのですか？

**西村** 実は新宿高校サッカー部に所属していたのは1年生の時だけなのです。子供のころから所属していた駒沢SC(サッカークラブ)との両立が難しく2年生からはクラブ一本に絞りました。運動は好きでしたから、2、3年生と体育委員長をやりました。授業以外の時間は体育祭や球技大会などの準備で体育教官室に入り浸りでした。確か校長杯は2、3年生と連続で獲得したような気がします。

— サッカー選手の間から審判を志したのは何があったのですか？

**西村** 駒沢SCで小学生チームのコーチもしていたのですが、そのチームが審判員の誤審で負けたことがありました。その時の子供たちの悲しい顔を見て、選手の夢を壊さないようなレフェリーになりたいと思ったのがきっかけです。それで、18歳になると同時に審判の資格を取りました。

— 国際審判員になるには幾つかの階段があるそうですね

**西村** 最初に取った資格は4級審判員です。Jリーグの試合を担当できる1級審判員の資格を取るまでには10年かかりました。現在、(財)日本サッカー協会に登録している審判員は約20万人、その内の144人が1級審判員です。私が国際審判員に登録されたのは2004年ですが、1級になれば誰でも国際審判員になれるわけではなく、フィジカル面や日頃のパフォーマンスを厳しく審査され、日本サッカー協会からの推薦を受けたうえでFIFA(国際サッカー連盟)に登録されます。

— 2010南アフリカW杯での選考過程はどんなものでした

**西村** 各国の代表チームがW杯に行くための予選は3年くらいかけてやりますが、実は審判の選考も足かけ3年のプロジェクトでした。2007年10月にFIFAより世界各地から合計54名の主審が候補として発表され、W杯に参加する30組が発表されたのは開催年2010年の2月です。それまでの間に、FIFAの主催する大会でのパフォーマンスが評価されました。私の場合、2007年U-17W杯韓国大会、2009年U-20W杯エジプト大会でのパフォーマンスが評価の対象になりました。この他にFIFAが開催するセミナーが4回あり、体力、ルールの知識、コミュニケーション能力、スポーツビジョン(視力、視野等)に関し徹底的にチェックされました。

— 体力面で見るのは足の速さやスタミナですか

**西村** 40m走を6回、150mのインターバル走を20回と、二種類のテストで速さと持久力を見られます。40m走では毎回6・2秒以内が基準になりますが、6回とも可能な限り早く走り、そして一貫したタイムを出すことで高い評価を得ることになります。

— 選考に残った時の感想は……。

**西村** よく残ったなあ、というのが本音です。残ったと言っても試合を担当できるかどうか

は、日本を発つ時点ではわかりませんでしたから、開幕日の審判団が発表されて自分たちの名前が呼ばれた時は、吃驚するとともに、「よかった、試合が当たって」と心の中でホッとしました。最終的に7試合も担当するとは思いませんでした。

—そして運命のブラジル戦を迎えるわけですが、あのレッドカードを上げている西村さんの確信に満ちた厳しい顔は多くの日本人の記憶に残っていると思いますが

**西村** あの場面はブラジルがオランダにリードされてイライラしていたので、何か起きるかもしれないという心構えがありました。そんな時にフェリペメロ選手が自分自身をコントロールできず相手を踏みつけてしまったんです。しっかりと見極められたので自信を持って判定しました。

— 厳しい競り合いの場面だったので、選手に詰め寄られるとかもっと大きな騒ぎになってもおかしくない場面ですよね

**西村** ポイントはポジション取りと問合いです。あの場面で選手に囲まれてしまったら、試合をコントロールすることは難しかったと思います。選手が集まっている場所を素早く通り抜けてから、この行為に対してレッドカードを示しました。もしあの判定や対応が間違っていたらこんなに注目されることもないし、このインタビュも受けていなかったと思います。

— 副審の役割も大きいですね

**西村** その通りです。主審が全てのプレーを近くで確認することは不可能ですから、オフサイドやファウルの判断を助けてくれる副審の果たす役割は大きいです。試合では主審と副審2人がお互いの意思を瞬時に伝え合って試合をコントロールします。私の副審は相楽亨と韓国の鄭解相（チョンハ）なのですが、2人ともとても優秀で、彼らとは2007年から組んでいますので、それこそお互いの意思の疎通は「あうん」のレベルに達していると思います。

— 話題は変わりますが、試合のない日の過ごし方は如何でしたか。治安の悪さが言われていましたが街に買い物に出る機会もありましたか

**西村** 審判団の宿舎は人里離れた場所であり、サファリパークの中に宿舎がポツンとあるような状態で、動物から私たちが逆に眺められているような感じの所でした。7試合担当できましたので、様々な会場に行くことがちよつとした旅行みたいな感じでした。それと、試合のない日も結構忙しいのです。試合翌日にはビデオを見ながらインストラクターを交えたミーティングがありますし、3日に1度は審判団全員が集められてのミーティングがあります。そして、体調維持と判定基準を一貫させるためのトレーニングが毎日ありました。地元の高校生が私達のために選手役として3時間の練習に付き合ってくれたおかげで、審判員たちの能力を高い基準で維持でき、W杯を成功に導くことができたと思います。

す。彼らの協力には本当に感謝しています。それから思い出といえ、夜が寒かったんです。昼間は17〜18℃と快適ですが夜は2〜3℃、おまけに部屋は藁葺き屋根なのでなかなか暖まらず、毎晩毛布を重ねて布団に潜り込んで寝ていました。今となっては、懐かしい思い出です。

— 緊張の中にもやり甲斐のあるキャンプだった訳ですね。

**西村** そうですね。各々が自分の担当する試合に対してベストの準備をする。よい緊張感を持ちつつ、大会を楽しむということも忘れませんでした。全世界から集まった本場にプロフェッショナルな集団でした。

— このW杯で得た最大の収穫と言いますと

**西村** アジアの、そして日本のサッカーが世界に認められたということに尽きると思います。大会では日本も韓国も予選リーグを突破しましたし、審判についても開幕日の2試合をアジアの審判団が担当し、決勝でも第4の審判、第5の審判を務めることができました。日本人の几帳面さ、勤勉さ、ルール遵守の精神が審判に向いていますし、FIFAもそこを評価してくれていたのではないかと思います。

— このインタビュも日程調整が大変でしたが、国際審判員は超多忙なようですね

**西村** 年間百日くらいは海外です。国内ではJリーグもありますし、Jリーグの他にも全大会等の試合が割当たることもあります。2010年はW杯があり、大会終了後も取材

があったり、12月にはUAEでFIFAクラブワールドカップがあったりと、国際試合が次々行われる特別な年でした。2011年にはアジアカップが控えています。立て続けではありませんが、大会に参加できることは本当に幸せなことです。

— そう言えば国際主審・西村さんの姿は今回初めて見た気がします

**西村** 自国のチームの試合のレフェリーはできませんから、日本代表の試合が行われている時には、私はどこか別の国で笛を吹いているということになります。W杯では、私のチームは日本と韓国の合同チームだったので、日本と韓国がかかわる試合も担当できません。ですから皆さんが私の存在を知らない当たり前のことですし、審判はそれでよいのです。今回、あのレッドカードがなかったら私の名前は皆さんに注目されることはなかったと思います。

— 国際審判はこれからも続けられるのですか

**西村** 国際審判員の定年は45歳です。そして国際審判員は1年ごとの登録です。自分の意志で続けるかどうかというよりは、国際試合でのレフェリングの評価や、国内の各試合でのレフェリングの評価を基にして、次の年に任命をどうかを日本サッカー協会が決定します。大きなミスでもしたら、次の年の登録は覚東ないという厳しい世界です。いつ

まで続けるということよりも、次に担当する試合に対してよい準備をして、全力で臨むことを一番大切にしています。

— 想像以上に厳しい世界なのですね。最後に今後の夢をお聞きできますか

**西村** 私の審判の理想像は「記憶に残らない審判」です。選手も観客の皆さんも「ゲームが面白かった」と満足してくれる試合というのは、試合を適切にコントロールしたからこそ審判が記憶に残らないのだと思います。最初にお話しした通り、選手の夢を壊さないことを目指してこの道に入ったので、これからもその初心を持ち続けて「選手のために誠意尽くすこと」が最初から変わらない私の夢です。

— 今日は忙しいところ貴重なお話を頂き有難うございました。今後ともご活躍をお祈りします。

### 西村さんインタビュー記

W杯から帰った西村さんを待ち構えていたのはメディアからの取材、そしてUAEでのFIFAクラブW杯。このインタビューが出来たのは、西村さんの身体が奇跡的に空いた年末の12月22日でした。年が明ければアジアカップ、2月からは審判員研修合宿と過密な日程が待っている中、PTA主催の現役学生のための講演会更にこのインタビューと、母校そして朝陽同窓会のためにも誠心誠意尽くして頂きました。(N)

### ◇「朝陽」表紙で見る60号の歩み

六中同窓会が発足したのは、昭和2月3月である。当時は「陸柱」という会報があった。戦後間もなく六中同窓会は朝陽同窓会と名称を変える(昭和22年4月)が、「朝陽」という名の会報が発行されるのは、昭和も30年になってからだ。

タブロイド版の「朝陽」は15号まで続き、昭和40年16号からはA5判の冊子になった。表紙の絵は六中一回生の角浩さん。(この経緯はp・68・69参照) 21号の表紙は中二回生の北島達夫さん。以降、その年々にふさわしい写真や絵などをアレンジして表紙とした。

異色は30号。これは、三十余年にわたり美術の教師をされた吉江新二先生の作品だ。題して「a view 私の六中勤務の頃(昭和22年)の心象風景。」

当初32ページで出発した冊子も徐々にページ数が増え、72ページにもなった。そこで、56号(07年)からはB5判に拡大し、横組み主体の編集とした。表紙、裏表紙ともにユニークなデザインとなり、会員諸兄弟に親しまれている。

21号の題字のスタイルが60号にも生きていることにご注目あれ!

(喜)